



酒田市 / 本間氏別邸庭園 (鶴舞園)

頂きに捧ぐ 緑の饗宴

 庄内銀行

Cradle 5 「クレードル」 出羽庄内地域文化情報誌

2018 May/June
平成30年5月1日発行(毎月奇数月発行)第8巻5号(通巻47号)

発行 / Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15(株)株式会社 出羽庄内地域文化情報誌
制作 / Cradle編集部 山形県酒田市京田2-59-3(コヤマ・クリューラジオ) 電話0234(41)0012

美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

特集
庄内「初夏」
写真季行
庄内憧憬
福田進一 クラシックギタリスト

「クレードル」出羽庄内地域文化情報誌

5

2018 May/June
TAKE FREE
NO.47



音楽を通じて広がった友情の輪。庄内での素晴らしいご縁の数々、これからも生涯大事にしたいと思います。

庄内の「人」に 魅せられて

福田進一

私が初めて庄内の地を訪れたのは、1992年であったと思います。それまでは内陸の山形市でのコンサートが多く、日本海側の庄内地方については、NHKドラマ「おしん」で語られる歴史や映像風景など、わずかな知識しかありませんでした。しかし実際に訪れてみて、じつに豊かな自然と山海の幸、肥沃な平野がもたらす最高の米、その米と清流から生まれる美酒に魅了されたのは言うまでもありません。

庄内での初めてのコンサートで、ふらりと楽屋を訪ねてこられたのが、のちに大親友となった菅原久也さんでした。菅原さんはアマチュアのギター愛好家で、本職は病院の事務長さん。多くの人から事務長と呼ばれ慕われていました。本当にギターが好きでたまらない菅原さんは、いつも満面に笑みをたたえ、温厚でユーモアにあふれていて、その人柄に魅せられた私は、その後も足繁く庄内を訪れては、彼が企画する演奏会に

出演するようになりました。そしていつの間にか友情の輪は広がり、酒田フィルハーモニー管弦楽団のメンバーとも親しくなって、定期演奏会ではアランフェス協奏曲を2度ほど共演しました。また、今では全国に知られるイタリアンシェフ、若き日の奥田政行さんとも知り合い、ジャズを愛する町長さんや、シンガーソングライターでもある造り酒屋の社長さんなど、音楽を通じて多くの楽しい友だちが次々と生まれていったのでした。

友情の種を蒔いてくださった菅原さんが、庄内の文化活動に残した大きな足跡として、素晴らしい音響を誇る「庄内町文化創造館響ホール」の設立があげられます。2002年に私がイタリアの恩師オスカー・ギリアと共にホールを訪れたことが発端となり、菅原さんが実行委員長、私は音楽監督となって、酒田フィルハーモニーをはじめ多くのボランティア有志に囲まれて「庄内国際ギ



上／今年3月3日、響ホールで8年ぶりとなる庄内ギターフェス「福田進一と仲間たち」は、満場の拍手でフィナーレを迎えた。
左下／2005年、恩師オスカー・ギリアを迎えた第1回庄内国際ギターフェスティバル。
中下／庄内町文化創造館 響ホール
右下／故菅原久也さんと。庄内町に素晴らしい音楽を届けたいという菅原久也さんの想いは、人から人へと伝わっている。
写真提供=庄内国際ギターフェスティバル in 響 実行委員会

ターフェスティバル実行委員会」が立ち上がりました。準備期間を経てたどり着いた2005年の第1回、2008年の第2回には、韓国や中国の生徒たちも集め盛況を極めます。しかしその間、菅原さんは人知れず厳しい病と闘っていました。そして忘れもしない2009年3月3日、菅原さんは惜しまれながら亡くなりました。悲しみが尽きることはありませんが、彼の遺志は実行委員会に引き継がれ、2010年には第3回のフェスティバルが開催され、さらに私個人にも、菅原さんから大きな置き土産をいただきました。彼に紹介された庄内の女性を人生の伴侶にしたのです。私にはいつでも庄内に帰ってくる理由ができました。親友たちの住む庄内が、家族の住む町になったのです。

庄内の人に魅せられ、生まれた素晴らしいご縁の数々、これからも生涯大事にしたいと思います。

ふくだ・しんいち／クラシックギタリスト。1955年大阪生まれ。1981年パリ国際ギター・コンクールで優勝。以後、ソロ・リサイタル、主要オーケストラとの協奏曲、一流ソリストとの室内楽共演を続け、世界を舞台に意欲的な活動を展開している。2018年にはスペイン、北米へのツアーを予定。平成19年度、日本の優れた音楽文化を世界に紹介した功績により外務大臣表彰を受賞。平成23年度第62回芸術選奨文部科学大臣賞受賞。「庄内国際ギターフェスティバル in 響」音楽監督。4月に「ボンセ作品集」カンシオン・メヒカーナ」をリリースしたばかり。

特集 SPECIAL EDITION

庄内「初夏」写真季行

草木が新緑に覆われ、さわやかな風がそよぐこの季節。
庄内平野は一面水鏡となり、山々を逆さに映し出します。
雪解けが進む山々では、自然や人間を含めたさまざまな
生ある存在が、命の営みをダイナミックに繰り広げ始めます。
その世界に魅了され、カメラを手に追いつけている方々に、
「庄内の初夏を綴っていただきました。」

鶴岡市あさひ地区を流れる梵字川。
初夏の日を浴びて若葉が輝き、藤の花が樹冠を彩る梵字渓谷。
写真＝斎藤政広

湯ノ沢岳山麓の
ブナ林の尾根道。



カスミザクラの花も散り、若葉がまぶしいころ、庄内平野の東の一角にある経ヶ蔵山に登った。標高は低い、ひと汗絞られるなかなかの山道だ。山頂の東屋からは、北方に美しい鳥海山がブナ若葉の上にそびえる。鳥海山を背に庄内平野を望めば、最上川がひとすじ日本海へとびている。平野の向こうには、月山からはじまって、遠く朝日連峰の雪が輝き、湯ノ沢岳、母狩山、鎧ヶ峰、金峯山の山並みが屏風のように連なる。ある時、鶴岡市朝日地域の落合から湯ノ沢岳に登ったことがある。ちょうど梵字川と大鳥川が出合い赤

が好きですと言うようにゆったりと飛んでいるが、雲が太陽を隠し、日が陰ると大きな路の葉などに羽を広げて止まる。そんなところから「太陽の申し子」とぼくは呼んでいる。

山里を離れ、若葉の色合いを強めた栗林を過ぎ、尾根をたどるように登っていくと、ブナの若葉も初夏の装い、木漏れ日が嬉しい山道が続く。息を切らしながら高度を上げて山頂まで登ると、ここは春ですよと言わんばかりにカタクリの花が姿を現し、ギフチョウが飛んでいた。

初夏のこの時期、山里ではウスバシロチョウが舞い、山頂周辺にはギフチョウが飛び、庄内の里山は不思議な時間に包まれる。わたしたちは太陽を感じてその空気に触れ、呼吸をしている。わたしたちとは、虫や花も含めた、つながり合う生きものすべてのこと。山や森そのものともいえるだろう。ブナ若葉に包まれた山頂に腰をおろし、フーツと深呼吸、わたしたちも自然の一部、地球に暮らしているということ、ここで意識してみるのもいいのかもしれない。

斎藤政広(さいとうまさひろ)◎昭和23年、神奈川県横浜市生まれ。酒田市在住。長く鳥海山などの登山ガイドを務めながら、自然写真家としても活躍。平成13年より写真冊子『ブナの声』を刊行。最新刊『026のテーマは「森の紳士録」第2集—蝶—の美しきもの』。購読希望の方は、0264-23030224#まで。

四季の山々を染めるブナの森。そこに一歩分け入れれば、たくさんの生命が集まって、森を構成しています。鳥海山を歩いて30余年、斎藤政広さんはその森の構成員たちを追い、時に彼らの視座に立って、自然の本質を見つめてきました。初夏の森には、あらゆる生きものが教えてくれる、原初的で美しい時間が流れているようです。

— 斎藤政広さん

チョウが舞い飛ぶ 若葉の里山

川となるとところに開けた地で、大鳥川を渡って最初に歓迎してくれたのが、5月の陽光にひらひらと飛ぶウスバシロチョウだった。語尾にシロチョウとついて、モンシロチョウの仲間のようなだが、アゲハチョウ科に属す。年に一度、春の花が咲きだす

ころに飛び出すことから「春の女神」と呼ばれるギフチョウと同じ仲間である。その姿は、ギフチョウのようにあでやかな赤や青の紋があるわけではなく、白地のヴェールを想わせる清楚で地味な色あい。ウスバシロチョウは、いかにも5月の太陽



春型模様のサカハチチョウ



吸蜜するウスバシロチョウ

経ヶ蔵山山頂の東屋から望む鳥海山。



6月に雪化粧をした鳥海山。扇子森から見上げる山頂が白い。

朝日が射した新山と影鳥海。

四季が同居する 鳥海山の初夏

— 佐藤要さん

東北の名峰・鳥海山は、その端麗な山容のなかに、登山者を魅了し続ける自然環境や現象なごが存在し、何度歩いても違う風景を見せてくれます。同じ山、同じ場所、同じ季節、同じものは一つもない山の姿を訪ね、カメラマンとして、編集者として、山歩きの魅力伝えてきた佐藤要さんが、追い続ける山岳風景を伺いました。

「初夏」とは六月を言うらしい。高度を上げた太陽から光が降り注ぎ、雪解けが進んだ稜線で花々が咲き始め、谷筋の残雪が面積を次第に小さくして山肌に縞模様を描く。春から夏に向かう躍動感を全身で感じながら、爽やかな山歩きができる季節だ。私の撮影テーマは、鳥海山のその一

瞬にそこにいたから見る事ができる山の表情を記録すること。光源は太陽、被写体は山。山の表情を描出する太陽の軌道は年中変化し、気象や四季の移ろい、一日の太陽の動きを重ね合わせると、山は一時として同じ姿を見せることはない。「影鳥海」は真夏の風物詩として多

岩氷に覆われた外輪山。遠く葉山や月山と庄内の海岸線が見える。



くの人に知られている。奇観と言われるのは、出現する気象条件に制限があるからだ。科学的に考えれば単なる山の影だが、鳥海山の特異な地理的条件や、標高2000mを超える端正な成層火山であることが意味を与える。山が最も劇的な表情を見せる夜明けの時間と重なることで、より幻想的な印象を持つことになる。2017年の春は、平野でも寒い日が続き、山には5月を過ぎても大量の雪が残っていた。6月初め、真冬並みの寒気が南下して山頂付近で

降雪が予想された。寒気が抜けた5日、扇子森から、秋の初冠雪を思わせるように雪化粧した山頂を望むことができた。七合目の御浜小屋を出発したのは日付が変わる頃。氷化した残雪と新たに積もった雪を踏んで、真夜中の外輪の尾根を登る。明るさを増す暁の空に追われるように七高山に立った時、地平線から太陽が昇ってきた。新山と影鳥海を一枚の写真に収めるアングルを慌てて探した。間もなく新山に赤い光が届き、左側の日本海に影鳥海が現れた。真夏のある日、山頂で影鳥海を見ながら、ふと真冬の影鳥海を想像したことがあった。その時から「四季の影鳥海」が頭から離れない。果たして冬期の撮影は可能だろうか。夜明けを待って、晴れることさえ希な真冬の山頂に立っていないならばならない。2017年の冬、2月末日に外輪山に募営し、3月中旬には月明かりを頼りに夜間登高で影鳥海の撮影を試みた。一度や二度でうまくいくはずはなく、「四季の影鳥海」は終わりのないテーマになりそうだ。

佐藤要(さとう・よう)◎昭和24年 北海道生まれ。庄内町在住。編集発行人を務める山の紀行文集『山歩きの雑記帳』は、創刊から9年の昨年、「残されている人生、心置きなく山を歩き、テーマにしてきた鳥海山の撮影に時間を費やしたい」との思いから、通巻36号で惜しまれつつ休刊。出版活動の再開が待たれる。

集「初夏」
庄内「四季」
写真行

島中裕之(はたなか・ゆうし)◎昭和42年、遊佐町生まれ。幼少期から自然と生物に親しみ、学生時代から自然写真に取り組み、日本山岳ガイド協会登山ガイドステージII、鳥海山・飛鳥ジオパーク認定ジオガイドのほか、山形県希少野生動物調査会にも属し、鳥海山を主に広範囲にわたる自然ガイドを務めている。

生きものたちには、それぞれの了見と生き方がある。了見も生き方も世界観も違うもの同士が、同じ場所でもどうやって融通をつけ、お互い頼りながらも利用しあって生きていくのだろうか。その問いを直接聞くことはできないが、虫や植物など、小さな生きものが暮らす風景を追いかけていると、その不思議の答えが少しずつ聞こえるような気がする。

生きものたちは、色や形など外見の素晴らしさ、ユニークさもさることながら、その暮らしぶりや行動は、多彩で不思議に満ちている。見た目、行動、すんでいる環境など「目に見えるもの」を通して、彼らの生き方や、そこで生きるようになった経緯(いきまじり)など、見えないものが見えてくる。生きものたちの姿から、その場所の「物語」と「意味」さえも浮かび上がってくるのだ。

キスゲと同じものといわれる。陸続きになったことのないはずの飛鳥へといつどうやって渡り、なぜ標高の低い場所で生き延びることができたのだろうか。

咲き誇るトビシマカンゾウのバックには、なぜか大抵海が広がる。



「初夏」というと、雑木林やブナ林を飛び交うチョウや、遅い雪解けを迎えて咲き出す山の上の花が好きだが、身近なところでも「絶景」が見られる。鳥海山のもとから庄内浜、そして飛鳥。そここに小さなお花島ができて、春から夏へと移り変わる季節を教えてくれる。

鳥海山から発する湧き水の流れ、清流「牛渡川」では、6月になるとバイカモの花が水面にゆらめく。冷たい水に生きるこの植物は、湧き水の中で1万年以上命をつないできた。その膨大な時間を想うと、涼しげなその姿も少し違って見えてくる。

山と海と川、里や野と、昔の遊び場だったその場所は、ここにしかない景色を心象風景として刻み、たくさん生きものとの出会いをもたらしてくれそうです。

鳥海山のもとで育った島中裕之さんは、多くの出会いの瞬間を写真におさめ、生きものたちの目で自然を眺めながら、「庄内の自然の面白さ」を今も追い求めています。

— 島中裕之さん

生きものたちが暮らす風景

南北にのびる広大な庄内砂丘、その砂地にもさまざまな植物が育つ。

ハマエンドウは、庄内浜一円どこでも見られる普通の花だが、もとは名前の通り、浜辺に生える在来種。野生はもろんのこと、人が植えた環境でもタフに育って鮮やかな花をつけ、そのマルチぶりに感心する。ま

た、庄内の春の味覚「きもと」と呼ばれるアサツキも、その本来の姿は、海辺の崖を一面埋め尽くす、美しくおいしい植物である。

初夏の飛鳥では、トビシマカンゾウが見頃となる。「トビシマ」と冠がつく通りこの島の名物だが、種としては鳥海山でも見られるニッコウ



冷たい湧き水の中、1万年以上前の水期から生き延びるバイカモ。



砂丘の砂地を覆い隠し、花園に変えてしまうハマエンドウ。





月山(標高1984m)8合目西側のタケノコ山(ムナカケ)。なかほどにラクダの背の形をした雨告山がある(2015年6月8日撮影)。

(左)ムナカケの道刈りに向かう羽黒山菜組合の山人たち(2008年7月5日撮影)。(右)月山筍60~70kgをバンドリで背負って帰途につく庄内町の山人たち。山奥からバイクを置いたところまで3時間の道程がある(2009年6月13日撮影)。



初夏、雪解けが進む月山では昔から、その道のプロである山人たちが、深い笹藪をかきわけて月山筍を採取してきました。

渡辺幸任さんは、15年にわたって取材し、その生業を世に初めて示した『出羽三山信仰と月山筍』の著者です。人知れず繰り広げられてきた初夏の月山筍採取について、改めて写真と文章で寄せていただきました。

——渡辺幸任さん

月山で生きる山人のごとくに

出羽三山の主峰・月山は、冬期間山全体が雪で覆われている。その山容は神々しくて人を寄せつけない。春先になって8〜9合目の尾根は雪解けで群青色になり、西側の急峻な山肌の残雪は雪崩となって緩やかな斜面に堆積していく。その広大な雪溪の下に、庄内では「ネマガリタケ」と呼ばれるチシマザサが群生するタ

ケノコ山がある。そこは標高1200mほど。地元の人が入るタケノコ山は8合目の西側にあり、通称「ムナカケ」と呼ばれている。6月に入ると、さらに雪解けが進んでネマガリタケの若芽である月山筍が採れるようになる。月山筍は雪溪が消える際から生えてくる。2mを超えるネマガリタケの竹原に潜り

込み、言うようにして探すと、枯れた笹を突き上げるようにして月山筍が顔を出している。その根元に指を入れて折ると、クキーンという音がする。全体の長さは15cmほど。その色合いはとても美しく、軟らかくて美味である。採取場所によって太さも巻き方も表面の色合いも違ってくる。それは赤や緑や黄色が入り混じったもので、まさに芸術品である。



雪溪が消えると、4〜5日で枯れた笹を突き上げるようにして月山筍が生えてくる(2010年6月18日撮影)。



美しい色合いの月山筍(2008年6月19日撮影)。

特集
庄内「初夏」
写真行

羽黒町手向や庄内町立谷沢の「山人」は、その色合いを見て、どこで採取したのかすぐわかる。起伏のある広大なタケノコ山で、どこに良い筍があつて、いつ出るか、そのすべてを知り尽くしている。子どもの頃から月山頂上小屋の仕事を手伝ってきた現小屋主の芳賀竹志さんは、「小屋で一番身近な食べ物月山筍だ。小屋にいて一番簡単に採れるし、採っても採っても尽きない。むしろ採らないとだめになる。月山筍は美しいし、旨い。料理しても絵になる。精進料理で主役として演じられる具材なんだよ。みそ汁、天ぷら、煮付けの他に、みそで炒めて出すこともある。小屋に来た参拝者は昔から月山筍を食べてきたんだ。文献にはないけれど、間違いなく芭蕉も食べている。それは断言できる」と話した。筍採りのシーズンが終わる頃、羽黒山菜組合の道刈りに加えてもらい、空き缶やペットボトルのゴミ拾いをしながら、何年も山人の撮影を続けてきた。道刈りをしなければ遭難者が出るから、それは大事な作業である。

渡辺幸任(わたなべ・ゆきと)◎昭和24年、熊本県天草市生まれ。都内の研究施設で電子顕微鏡技師として勤務後、昭和53年から鶴岡市在住。平成6年より庄内日報に連載。著書に『出羽三山絵日誌』(平成18年発行)、『出羽三山信仰と月山筍』(平成25年発行)がある。鍼灸師。庄内民俗学会員。はぐろ山岳捜索隊員。

太田威(おた・たけし)◎昭和18年生まれ。2歳で鶴岡市大山に移住。昭和49年に自然写真家として独立。以来、『ブナの森の四季』(新日本出版社・昭和58年)、『トチの木の1年』(福音館書店・平成24年)など数々の著書を出す。専門は自然保護と自然観察。日本野鳥の会、尾浦の自然を守る会。

餌を探りながら体力の回復を待つ。しかし、それでも体力が回復しない場合は、残念ながら池で一生を終えることになる。

夏鳥のバンやカイツブリは、毎年池で子育てをする。雛が孵ると、雛は親に見守られながら一緒に行動して餌を探る。親は常に、イタチやタカ、アオダイショウなどの外敵に目配りをする。その中で、雛はすくすくと育っていくのだ。

その雛がさらに大きく成長する頃、水面ではハスの巻葉が顔を出し、徐々に開いて大きい葉に成長する。そして7月の中旬頃から、ハスのつぼみが次から次へと無数に生えそろう、極楽浄土のような見事なハスの花を咲かせる。

池が満開のハスの花でいっぱいになる頃を境に、雛鳥はもう立派な一人前の若鳥に成長した。

親鳥の依存から次第に遠ざかり、ひとりで餌を探し、ひとりでねぐらで一夜を過ごすのだ。雛鳥は、もう親を頼らず池の大自然の中を力強く生きていくだろう。

ハスの茎に止まって、
小魚をねらうカワセミ。



鶴岡市大山の高館山のブナ林の麓には下池が、隣の八森山のブナ林の麓には上池がある。両池とも昔からの灌漑用池で、今も田畑を潤し続けている。その上池で、蓮華は夏に花を咲かせ、花托に実をつける。

私は子どもの頃から秋の中頃になると、蓮根を探りに腰まで泥まみれになって池に入っていた。足で泥を払いのけ、両手で長く白い天然の蓮根をつかみ、引き抜いて採り集め、食料にしていたのだ。

その頃は寒かったため、ハスの葉や花托は急速に赤褐色に枯れて、冬になると池から完全に姿を消している。

た。しかし近年は温暖化のせいとか、ハスの茎や花托は赤褐色に枯れたまま、雪や氷の冷たさにも関わらず一冬を越して、姿を残すようになった。そして5月の下旬頃、ハスの茎や花托の残る水面に、小さいハスの葉が水中で開き始める。紅色や黄緑色

の葉を無数に浮かべ、池は華やかな水面に変身するのだ。

すると水鳥たちが何処からともなく姿を現し、活動する。

体調を崩し、北国の生まれ故郷に帰ることができない冬鳥のヒドリガモやオナガガモなどは、池に居残り、

大山上池の初夏を彩る ハスの若葉と水鳥たち

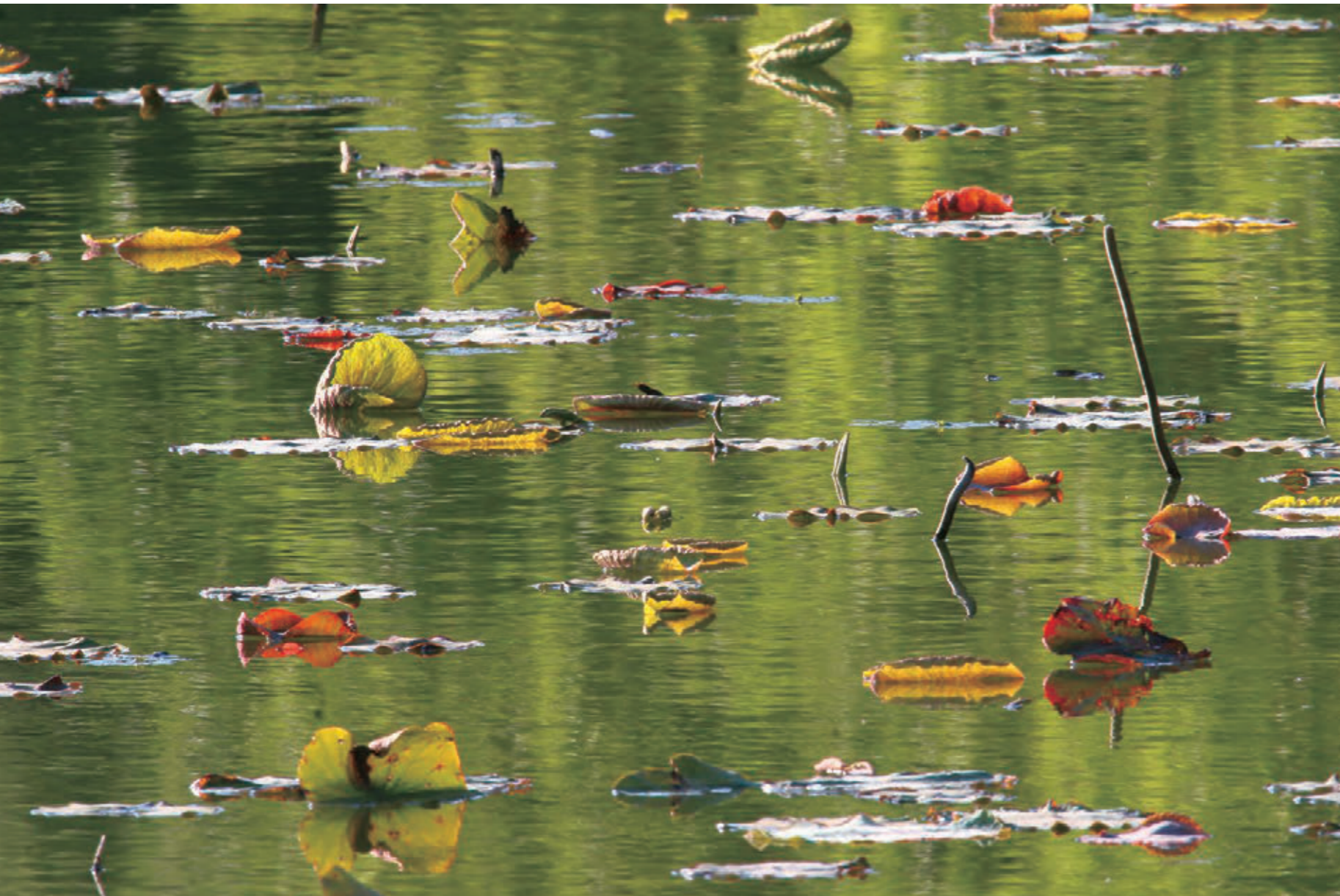
鶴岡市大山に育ち、上池のほとりに自宅兼仕事場を構えて30年余り。以来、カメラを通して二つの池を毎日眺め続けてきた自然写真家・太田威さんに、ハスの花が満開に咲き誇る前の上池のドラマを寄せていただきました。

——太田威さん

ハスの若葉の水面と
カイツブリの親子。



緑の水面に顔を出したハスの
若葉。やがて緑色になる。



鳥海山麓の牧場から届いた
新鮮なヨーグルトと純米大吟醸酒を
絶妙にブレンドした「ヨー子」から
何やら目が離せない!

楯の川酒造の お酒「ヨー子」

鳥海山麓の山小屋で新鮮なヨーグルトができた週末だけオープンする「BARヨー子」。ここで出される濃厚なヨーグルト酒と、店主「ヨー子」の虜とらとなった酒造会社の社長が、ヨーグルト酒の商品化に乗り出した。そんな架空のストーリー設定で今年1月に発売が始まったお酒「ヨー子」が今、大きな話題を呼んでいる。

手がけているのは酒田市にある楯の川酒造。天保3（1832）年創業の同酒蔵は、平均年齢30代半ばのスタッフ陣が、6代目社長のもと新しいことにチャレンジする蔵としても知られている。その一つが、平成22年に純米大吟醸だけを醸す蔵に転換したことだ。最高ランクの酒しか造らないという決断は全国でも画期的なものだった。そしてもう一つが、当時まだ珍しかったリキュールの製造販売に乗り出したこと。県内の果物農家を応援するとのコンセプトで平成19年に始まったこの「子宝」シリーズは、地元鳥海山麓のヨーグルトを使用した酒の登場によって一躍ヒット商品となった。

今回の「ヨー子」は、鳥海山麓の2種類のヨーグルトと蔵自慢の純米大吟醸酒を絶妙にブレンドした「子宝」の特別版だ。度数は6度と低めのためストレートやロックでそのまま楽しめる。トロリと口の中に広がるまろやかさは、まさに一度飲んだら虜となる味わいだろう。ちなみに鳥海山麓のBARでアンニユイに客を惑わすヨー子は、体のことを考えて「乾杯はビールではなくヨー子」を広めたいらしい。つまみには、大豆のたんぱく質がカルシウムの吸収を助けるから豆腐がオススメとか。その思いやりに、またやられた。



原料は、鳥海山の麓から届く2種のヨーグルトと蔵元自慢の純米大吟醸酒。全国の「子宝」シリーズ取扱店にて絶賛発売中です。「子宝」シリーズは、不動の人気を誇る鳥海山麓ヨーグルト(写真右)をはじめ、山形フランス(中)、庄内砂丘のいちご(左)、大吟醸梅酒など約20種類。こちらもぜひお試しを。

HP「BARヨー子」 <https://bar-yoko.jp>
楯の川酒造株式会社 ☎0234-52-2323

(取材・文 長谷川結)





奥丁字桜

山肌一面に咲いている。風は花たちのささやきであり、日の温もりは花たちの笑顔となる。

春禽や切口ほうと檜の薪

— 藤田湘子

この山には藩政時代から保護されてきた豊かな自然が残されている。沢筋には檜や山毛櫨、水檜の大木を見ることが出来る。こんな低山で森閑とした雰囲気を感じることが出来る。時折、啄木鳥や春禽の音が響く。見上げると木々は芽吹き、枝の間を流れる雲が山頂へと導いた。山頂にある展望台から鳥海



林床に差し込む春光

春光の高館山を歩く

春は、駆け足でやって来た。数十年ぶりともいわれた大雪の冬が嘘のように暖かい日が続き里山の開花の便りが届く。待ち焦がれた春に追い越されないよう春の花に会いに高館山へ向かった。

庄内俳句紀行

季語
春光
(しゅんこう)
春のやわらかな陽光。
春の景色、春の風光。

鶴岡市大山の西方2キロに位置する標高273メートルの高館山は、県立自然公園、自然休養林に指定され、林野庁の「森林浴の森100選」に選ばれている。麓から見る山はすでに所々、うっすら萌葱色に色づき始めていた。鶴岡市自然学習交流館「ほとりあ」に立ち寄り、開花情報を確認する。

百万本片栗みんな反りて咲く

— 阿部月山子

大山公園から入り登り始めると、春先の林床は明るく、山道をなぞるように片栗や狸々袴が咲く。吹き抜けるまだ冷たい風に、白い小さな花が揺れる。日本海側で育つ野生種の桜で、庄内地方で一番早く咲くという奥丁字桜である。俯き咲きに楚々としたその花はあまりにも可憐で、細い枝は深い雪にも負けないしなやかさが美しい。春の光りに透き通る花弁は、白さを一層際立たせていた。さらに進むと大岩団扇、菊咲一華、片栗などが



二輪草

山、そして白砂青松の日本海、金峯山、月山をパノラマで望む。

ラムサール条約の風みすみそう

— あべ小萩



延胡索

帰り道、沢づたいに降りると、煌めく清流に沿って二輪草が咲き始めている。小さな蕾が桜色に縁取られ、いまにも開きそう。延胡索がモービルのように揺れる。麓にある「大山上池・下池」は、平成20年にラムサール条約湿地に登録され、冬には小白鳥などの冬鳥が飛来し、夏には蓮の花が湖面一面に咲く。

吹かれたつ白きを蝶の初めとす

— 上田五千石

これから初夏にかけて、次々と花が咲き、木々の若葉は緑を濃くしていく。毎日違う表情を見せ、何度歩いていても発見がある。毎年決まって会う花と再会を喜び、今年初めて出会った花には「また来年会おうね」と約束する。春の高館山は花の魅力にあふれる。次はきつと初蝶に会えるだろう。



展望台からの眺め

写真・文 あべ小萩(月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員)
写真協力 間真由美